

月曜随想

塩飽は心の故郷

昨秋、五色台の瀬戸内海歴史民俗資料館から坂出への帰り道、とても素晴らしい景色を見た。夕焼けをバックに瀬戸内海に点々と浮かぶ塩飽の島々の姿が、波間にくっきりと映えていた。その美しさに思わずカメラのシャッターを切った。私は神奈川県鎌倉市の海の近くに住んでいるが、海の輝きが全く違う、塩飽の海のような深遠たる青さがないのだ。

塩飽を訪ねるのは二度目だが、島の中を歩いていると、ゆったりと流れる時間の中で、数多くの歴史的財宝と出会う。道端に立派な人名の墓が立ち、由緒正しい寺や神社がある。立派な仕掛けの千歳座に付むと、往時の人々の賑やかな喝采が聞こえてくるようだ。

笠島のまち並保存地区を歩けばタイムスリップしたような気分になる。塩飽大工が腕を振った凝った彫刻を施した下屋を支える持ち送りや矢来と呼ばれる美しい石垣の連なり、この道をたづねてきたのだと思うと



こうやま
高山みな子

フリーライター

胸がわくわくしてくる。中でも塩飽勤番所は私の最も好きな所だ。古文書の宝庫で、織田信長、豊臣秀次、徳川家康等の朱印状があったり、高松領と塩飽領の狼場論裁許書の評定衆の一人に大岡越前守の名前が見られ、塩飽諸島を克明に描き境

界線をはっきりと引き、線上に評定衆の押印がある地図が添えられている。昔も今も変わらない、領地問題は重大で皆必死なのだ。何ともリアルな文書だと思う。

ところで私の高祖父、勝海舟が塩飽の水夫の人々とともに、長崎海軍伝習所からの江戸への帰途、朝陽丸でこの塩飽本島へ碇泊したのはちょうど150年前の1月のことだ。現在の勤番所から小学校・中学校の南側は当時まだ海で、千石船が30杯近く入れたそうでおそろくそのあたりで碇を降ろしたと思われる。

海舟は「氷川清話」で「年来、おれと共に船で働いてくれた水兵などが、皆この島の人間だったからだ」と碇泊の理由を話す。山路愛山の著作

「勝海舟」では、長崎海軍伝習所に多くの塩飽の水夫が選ばれたのは「豊太閤が朝鮮征伐をした時に、小塩飽島から多くの壮丁を募り、それを水夫に使ったが、其の水夫が能く働いた」からだと言われている。

海舟はよほど塩飽の水夫を信頼していたのだと思う。遣米使節が派遣されるという話を聞き、急ぎ江戸へ帰ろうとしている最中にわざわざ本島沖に碇泊しているのである。その折、短艇で隣の広島へも渡ったように思われる。真木信夫の「咸臨丸と讃岐」に広島茂浦正福寺に、この寺の前で泉声を聴いて書いたという「林下聴泉声」という海舟の扁額が伝わっているという記述がある。

塩飽水夫と船大工の優

秀性は戦国時代に公に認められ江戸幕府へと引き継がれていくのだが、幕末近くなると、ペリー来航後に神奈川県三浦半島の軍備の要所、浦賀や長崎海軍伝習所、観光丸等軍艦運航のためにあちこちに派遣されていく。水夫の徴用は塩飽の人々にはかなり負担になっていたと思われる。勤番所に保存されている藤井家文書で、面白い文書を拝見させていただいた。文久3年(1863)笠島年番治八の記録によると、どこまでも応募者が一人足りない。そこでなんとくじ引きで選んだのである。幕府御用で出仕する人をくじ引きで決めるなんて驚きだった。くじに当たってしまった伝三郎の名の上には墨で黒々と印が付けられて

いた。当時の人達は皆真剣そのものだったろうが、その場を想像して不謹慎にも思わず笑ってしまった。

残念ながら本島は住民も減り当時の繁栄の面影はなくなってしまった。前回2006年に行った時宿泊した民宿も閉鎖された。しかし、朝一番のフェリーで島に着き、本島神社や当時から姿を残す制札場を見、勤番所で文書を見学し、参墓にお参りし笠島を散歩すれば、あつという間に一日は過ぎてしまふ。星空に見守られてフェリーから振り返れば、本島は歴史のロマンいっぱい文化遺産に思われてならない。塩飽は私の心の故郷でもある。今一度、島々が活気づくことを切に願うばかりである。